かささぎ通信 第163号

毎月第2金曜日 13：30～15：30
刈谷市中央図書館研修室　参加自由

2026年　10月　9日　発行
森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年9月の「森三郎の作品を読む会」では、「銀（しろがね）の馬車」と「唐（から）からお年だま」（『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月）を読みました。

「銀の馬車」は五つになる男の子を持つ夫婦の家に、突然旅の老人が訪れて、「子どもの頃は確かに持っていたが失われてしまった幸福を訪ねて旅に出ている」と語る話です。幼い頃に自分が寝た後、母親が銭湯に行ったことに気づいて泣きながら母親の元へ行き、母親に会えると安心しきったこと、少し大きくなってからは、母親の後を追ったりはしないけれど、母親が帰ってくると、嬉しさの変形した気持ちから母親にくってかかったことなどを話します。そして大人になって両親がいなくなった時、「母の帰りを待ちわびた頃は、自分では気づかずに持っていた幸福が、いつの間にかなくなっていること」に気づいたと語ります。それから失った幸福をたずねて長い旅に出たというのです。

失った幸福は、たとえば自分が子どもを持つという幸福では変えることはできないのだと、老人は考えています。そして三百年もの間、あきらめることのできない、つらい旅を続けているというのです。老人が外へ出て行ったあと、野の果ての黒い山の裾を銀の馬車が一台走ってゆき、すぐに山陰に隠れてしまったという場面で話は終わっています。タイトルの「銀の馬車」がここに出てきました。「銀の馬車」は何を意味するのだろうと、集まった会員はしばらく思い思いの感慨に浸っていました。

この話の中で老人は少年の気持ちを説明する時に、夢二の詩を引用しています。「私の親は実の親／ついぞ私をにくまねど／なぜか私はきがすまぬ／うらの菜園に出てみれば／今日も今日とてからからと／さいかちの実のなりいずる」これは『夢のふるさと』（1919年、新潮社）の中の「浦の菜園（さえん）」の一部です。親の愛情と、それを素直に受け入れることのできない少年が描かれています。むしろこの詩に触発されて「銀の馬車」は書かれたと言えるかもしれません。三郎には、竹久夢二の詩と結びつけた作品が他にもありました。『雪こんこんお寺の柿の木』（1943年、泰光社）の「角田川」の冒頭の詩について「冒頭の童謡は竹久夢二氏作の『をさなき夢』の一節です」という注が文章の最後に書かれています。他に「越後獅子」（『どんたく』1913年、実業の日本社）なども使われています。

前号162号の「かささぎ通信」に「新葛の葉ものがたり」の六部の姿で全国を行脚する主人公の姿は「かささぎ物語」（『赤い鳥』1931年12月号）の主人公の姿でもあることを書きました。「かさぎ」の織る布のおかげで二人幸せに暮らしていた「真壁」は、「見るなのタブー」を犯したために「かさぎ」を失った後、「かさぎ」によく似た女の子を探し出そうとして旅に出かけ、とうとう一生帰ってきませんでした。失って知った幸福を探しに今も旅を続けている真壁の姿を、三郎が現代の話に書き換えたような老人の姿でした。

「唐からお年玉」は浦島太郎と乙姫様の婚姻までをいろいろな昔話や黄表紙などの話を使って書いたパロディー作品です。タイトルの「唐からのお年玉」は森羅万象作の黄表紙「面向不背御年玉」天明7年(1787)からヒントを得ています。『雪こんこんお寺の柿の木』1943年の「十二の桃」にも登場しました（「かささぎ通信」136号参照）。桃太郎とかぐや姫の結婚の話で、その中にも浦島と乙姫の婚姻が出てきました。戦中の作なので軍需工場などという言葉が出ましたが、今回の作品は1949年の出版ですから、浦島のところにやってきた潜水夫が「日本は今度戦争に負けました」「反省の時代」「食糧難」などと語りかけています。両作品のつながりが分かります。

〈次回予定〉2026年11月6日（金）午後一時半～三時半、
刈谷市中央図書館2階研修室
「いのちの花輪」「灰いろの蝶」（『幼年童話集　帽子に化けたクロネコ』東京一陽社、1949年2月）